

水稻の後期管理 おいしい『奈良のお米』に仕上げましょう

実りの秋を迎える季節になりました。中山間では刈取りも始まり、平坦では刈取りまで約1ヶ月となりました。おいしいお米を収穫するために、ポイントをお知らせ致します。

水管理は適切に・・・

高温・高夜温によるイネ株の消耗が高温障害を助長します。水利の良い田では、開花期以後にかけ流しの水管理をし、地温を下げて稲の消耗を抑えることで、品質低下の度合いを減らすことができます。刈り取り作業のしやすさを優先して早期に落水すると、未熟米や胴割れの増加により品質が低下しやすくなります。高温下では品質低下が一層助長されてしまいますので、収穫作業に支障のない限り、できるだけ落水は遅らせます。

適期刈取

刈り遅れにも注意！

出穂時より早生品種で35～40日前後、ヒノヒカリで40～45日前後、穂が90%程度黄色くなった頃が刈取り適期です。葉色がまだ緑色をしていても、穂の色が黄色になったら、葉色にとらわれずに刈り始めて下さい。また極端な早刈りは、未熟米（青未熟米）が多くなります。

玄米水分は14.5%を目標に仕上げ・・・

乾燥のし過ぎは、食味を悪くし、胴割米が増えて品質を非常に悪くします。
高温で急激な乾燥をすると、胴割米をおこします。

調整・選別を完全に

モミ混入や肌ずれ米の発生をなくすため、モミ摺機の調整を適切に！

毎年、米の入庫検査時における下位等級への格付の主な原因はモミ混入がほとんどです。モミ摺時には必ず調整を行って下さい。

適正量目の確保・・・

出荷米の量目については、正確な「ハカリ」で正しく計量(皆掛重量 30.5kg)願います。

ライスグレーダーや自動選別計量機等の米選機の網目 1.8mm (M) 以上で選別調整し、屑米を除去して下さい。

生産履歴の記帳の徹底

農薬の安全使用基準を守り安全な米づくりを行い、その内容を栽培日誌に記帳することが『奈良のお米』の信頼を高めます。

農協へお米を出荷される全ての方々に生産履歴記帳の提出が必要となります。

刈取りの後は、土づくりの季節です。土づくりについてご紹介します。

水稻の土づくり

土づくり3つの基本

稲わら+石灰窒素

地力向上
(20kg/10a)

土づくり 肥料の施用

とれ太郎・ニューケイカル・ミネカル・
ニューみのりアップ・農力アップ・
ようりん・ケイ酸加里・重焼リン・
リンスター

深耕

耕起は
ゆっくり深く

稲わらは最高の有機質資材 石灰窒素と併用で堆肥化しましょう。

1. 稲わらはよく腐らせておきましょう。

早く腐らす方法

- ◎稲わらは、田植え時期までに腐らせておかないと、田植え後稲わらが腐るため、元肥のチッ素を吸収したり、有害ガスが発生し、稲の生育が阻害されます。
- ◎稲わらを早く腐らせるには、微生物・温度・水分とチッ素が必要です。石灰窒素(20kg/10a)を稲わらと一緒にすき込みましょう。

例 1

普通田
(省力タイプ)

とれ太郎 3～4袋/10a

とれ太郎は、ケイ酸の吸収性の高い新しい省力タイプのリン酸を含む土づくり肥料です。

例 2

普通田

ニューみのりアップ 5～10袋/10a

砂質田
(秋播田)

農力アップ 3～5袋/10a

例 3

普通田
(従来タイプ)

ニューケイカル 5～10袋/10a

砂質田
(秋播田)

ミネカル 5～10袋/10a
と ケイ酸加里 1～2袋/10a

と

ようりん 2袋/10a
又は
リンスター 1～2袋/10a
又は
重焼リン 1～2袋/10a

普通田にはケイ酸施用

ケイ酸はチッ素のなんと10倍も必要です。ケイ酸は稲の成長に欠かせません。生育の初期から成熟期まで多く吸収されて、稲の体を強くし、病虫害の進入を防ぐ効果が期待できます。

お問い合わせは、お近くのJAならけん営農経済センターへ

発行：本店 営農振興部営農推進課 経済部農業資材課

